

「乱歩と戦争」講演会感想

村松 まりあ

二〇一九年六月五日、俳優・佐野史郎氏を迎えて「乱歩と戦争」と題した講演会が大衆文化研究センター主催で開催された。

立教大学に隣接する通称「乱歩邸」は、昭和九年に四十六回目の引越して転居してきてから、昭和四十年にこの世を去るまで江戸川乱歩が生活していた家である。だから、乱歩がアジア太平洋戦争の時期を過ごしたのもこの家だった。しかし、戦時中の乱歩については、近年、立教大学の石川巧教授の調査によって、昭和十七年に海軍省の外郭団体「くろがね会」の会報に原稿を寄せていることが明らかになったものの、一般的には、小説の筆を折り、もっぱら「貼雑年譜」の作成と町内会の活動に勤しんでいたというイメージが根強い。またその時期を外しても、探偵小説作家である乱歩の作品に戦争との関わりはあまり感じられない。「乱歩」と「戦争」、あまり聞きなれないこのタイトルで、どのようなことが語

られるのだろうか。期待を膨らませながら当日を迎えた。

その日は朝から重苦しく雨が降り続き、まさに「乱歩日和」な天候ではあったが、開場前から多くの人が詰めかけていた。講演は、佐野氏にとつて乱歩との初めての出会いとなった「少年探偵団」シリーズの話題から始まった。佐野氏が初めてこのシリーズを読んだのは九歳の時。父親に買ってもらった『電人M』で、金属のロボットが実はゴムの風船だったというトリックのフエティッシュさに魅了されたと言う。乱歩邸に訪れる方の中でも、佐野氏と同世代の方はやはりこの「少年探偵団」シリーズを乱歩との出会いとしてあげることがほとんどで、このシリーズが、いかに当時の少年少女の必読書となっていたかが窺える。

大活躍するシリーズの執筆が、ちょうど、国家を憂いて天皇を信奉した陸軍のエリート青年将校たちの二・二六事件と同じ時期であることに気がつく。一方は国家に保護され、一方は国家に罰せられるこの少年たちの相違に、乱歩の思いを読み取っていた。

江戸川乱歩に関する研究は、これまでも膨大な蓄積があるが、まさかあの「少年探偵団」が、そのような形で「戦争」というテーマと結びつくとは考えもつかなかった。もちろん、「少年探偵団」にはそのような時代状況を思い起こさせるような記述は見られない。しかし「現世は夢、夜の夢こそまこと」という、乱歩の座右の銘を思い起こせば、現に書いていなくても、そこには実は何らかのメッセージがあるのではないかと、佐野氏は語った。俳優である佐野氏は、師匠である唐十郎から「書いてあるものを信じるな」と言われてきたそうだが、そうして培われた俳優ならではの姿勢が、今回の「乱歩と戦争」という講演の根幹にあるのだろう。それから「俳優ならではの」と言えば、講演の最中、佐野氏による乱歩作品の朗読を聴くことができたのも思わぬ幸運であった。

また、俳優・佐野史郎と言えば、これまで何度か乱歩作品に出演しているが、私の同世代では、そのような映像化・舞台化された作品が乱歩との出会いだと言う人も多いのではないだろうか。現在も、「少年探偵団」シリーズが少年少女たちの必読書になっているかどうかはわからないが、乱歩作品の映像化は未だに後を絶たないし、東京近辺の劇場の公演案内を見ていると、一年に一度は何らかの形で乱歩にまつわる作品が上演されている。だからこそ、今回話題の中心となった「少年探偵団」シリーズの第一巻「怪人二十面相」などは、鉄板素材だ。しかし、作品の発表から八十年以上の月日が経ち、その間に何度も映像化・舞台化されても、新たな「怪人二十面相」が作り上げられ続けているのは、演出家や演者の努力は勿論、乱歩作品にも様々な想像を掻き立てる魅力が内包されており、それが創作の原動力となっているのではないかと。今回の佐野氏の講演を聞きながら、そんなことを考えた。

講演会の後には、池袋の某中華料理店で打ち上げが開かれた。店を出て、佐野氏と一席を囲むという思いもよらない幸福に浸りながら、ふと足が止まった。

待てよ。たった今、現に眼の前に

た「佐野史郎」こそ、もしかしたら姿を変えた怪人二十面相だったのではないだろうか……。

(なお、佐野史郎氏の講演会の様子は、

『大衆文化』第二十二号の「佐野史郎氏特別講演記録「乱歩と戦争」を御参照下さい。)